2018 年 3 月 28 日放送

印象に残る症例②

ふみぞの松田皮膚科　院長　　**松田　三千雄**

西洋医学では冷えは問題にされませんし、体を温める薬もありません。しかし、冷え症の人は体が弱く色々な病気や症状を訴えることが多いです。また、冷えの治療が他の症状や病気を治す事も数多く経験されます。ゆえに冷え症を治すことは本治の神髄と言えます。

一口に冷えと言ってもピンからキリまであります。私は冷え症も重症度分類が必要だと思います。個人的には軽症冷え症、標準冷え症、重症冷え症の 3 段階に分けています。軽症冷え症は体の冷えはそう感じませんが足の冷えは感じる人です。簡略化すると軽症冷え症は足だけ冷える人です。標準冷え症は少し体の冷えを感じ手足を触ると少し冷たい人です。でも、手を触れると氷のようには冷たくなく、靴下をはいて寝たいほどは冷えない人です。まとめると標準冷え症は手足の冷えがある人。重症冷え症は手足が氷のように冷たく、靴下をはいて寝たいほど冷える人です。簡略に言うとメチャメチャ冷え症です。気血弁証に当てはめると軽症と標準冷え症は気虚、重症冷え症は陽虚です。

中医の気虚の定義を見ると疲れやすい、冷える、風邪をひきやすい、その他のように色々な症状をひとくくりにして気虚としています。気虚の中核症状は「疲れやすい」です。気虚に分類される人の中には疲れやすいだけの人もいれば、疲れやすく且つ手足の冷えも感じる人もいます。疲れやすいだけの人は冷える人に比べるとまだ軽症と考えられます。疲れやすいを治す薬が補気剤です。人参と黄耆を基本に用います。人参・黄耆は体を温める点では

力不足、元気づけるが精一杯です。

軽症、標準、重症冷え症に対しては体を温める補陽薬を用います。ポイントは桂皮、乾姜、附子です。乾姜が基本で、附子が最強です。桂皮は軽く暖めます。体の温める強さは弱い順に桂皮、乾姜、附子です。

軽症冷え症は桂皮で十分です。エキス剤では十全大補湯や人参養栄湯です。標準冷え症は乾姜が必要です。エキス剤では人参湯が基本薬です。重症冷え症即ち陽虚には附子で対応します。

陽虚は基礎体温、基礎代謝に相当する命門の火が陰った状態です。命門の火のかげりも更に 2 タイプに分けられます。一つは年のせいで代謝が落ちて陽虚になった場合です。強い冷えだけでなく夜間尿や足腰の弱りなどの老化兆候も合併します。このタイプは腎陽虚と呼ばれ、八味地黄丸を基本薬として用います。もう一つは若い女性の重症冷え症のように老化兆候を伴わない陽虚です。脾陽虚と呼ばれます。命門の火の管理は基本的に腎の役目です。しかし、命門の火の維持のためには食物から得られたエネルギーが使われます。あまりに脾即ち消化機能が弱いと基礎代謝に回すエネルギーも十分に供給されないため陽虚が起こります。標準冷え症の人参湯に加工附子末１ｇをたした附子人参湯（附子理中湯）を基本薬とします。冷え症の人の多くはここまでの治療で温まってきて、元気を取り戻していきます。

しかし、中医火神派と呼ばれる流派はもっとひどい冷え症を想定しています。いわばウルトラ冷え症です。火神派は強烈な冷え症にも関わらず顔の火照りなどの熱症状が混在するのが特徴です。火神派は清代末同治帝、光緒帝の時代（1862~1908）に四川省で誕生した流派です。創始者の鄭欽安は附子、桂皮など温熱薬を重視すると共に、体の水の偏在を是正するために麻黄などの利水剤を併用して治していました。これからお話しする症例は真気上浮と考えられるため、真気上浮について述べていきます。

従来の中医学では陽＝エネルギー、陰＝血+水＝血液や体液＝エネルギーを支える物質、つまり燃料が定義です。腎陰は陰の根本で基礎体温や基礎代謝に相当すると考えられる命門の火の燃料です。ただの物質です。火神派では腎陰は命門の火で温められたエネルギーを伴った燃料と考えます。いわばぬる燗状態の燃料を坎水と呼んでいます。坎水中のエネルギー部分を真陽と名付けています。

陽虚は真陽の衰えと同じです。真陽が衰えると陽気は陰の力を制御できなくなり本来下部に治まっていた坎水が領域を越えて広がることがあります。ですから陽虚の人は浮腫みやすいです。重症陽虚では真陽が本来の位置を離れ暴走する事があります。真陽はエネルギーの一種なので体表面や人体上部に暴走しやすいです。

人体上部に行くと元来超冷え症なのに顔がほてるなど熱症状が出て、且つ水も同時に移動するので顔が浮腫みやすくなります。この症状は陽気が衰えてくる 11 時から 15 時に症状が出て 23 時頃から消えていきます。

症例は 80 才女性。既往歴で慢性 C 型肝炎が有ります。15～20 年前から体の冷えが気になっていました。最近はとにかく寒く感じ、寒さで夜に眠れないほどです。初診は X 年 9 月 1 日です。夏でも半袖無しにくらせる釧路でさえこの頃の気温は 23/18 度くらいでした。

患者はとにかく寒いと言っていました。手足を触ると確かに氷のようです。体が冷えているのに午後から夕方になると上半身が汗ばんできて熱い様な気もすることがあります。寝る頃の 8～9 時ころになると冷えてきて汗ばみはないのですが電気毛布を入れて寝ています。夜中の 12 時過ぎには電気毛布を入れているにもかかわらず寒くて目が覚めます。脈は沈、弱。腹力はありません。舌体は淡紅でした。

話の中で水虫のことも出てきたため、足を見ようとしました。すると驚いたことに六枚重ねでした。外気温は 20 度もあるのです。肌に直接触れる一番内側から股引、薄いフリース、別な股引、別なフリース、綿入りズボン、一番外側にジーンズの 6 枚です。

極度な冷えから腎陽虚と考え牛車腎気丸 7.5g 分 3 に加え加工附子末 1g を追加しました。汗ばむ症状は火神派のいう水の偏在と考え、麻黄の入った薬を考えました。長期服用しても比較的安全な葛根湯 5g を昼と夕方に分けて飲んでもらいました。

飲むと午後の汗ばみは減って夜冷えて目が覚めることはなくなり、少しからだが温まった感じに成りました。同処方を継続としました。

この症例は強い冷えがあって高齢であるので基本的に腎陽虚です。汗ばみが午後から夕方にかけて見られて真夜中から午前には消える水の分布の日内変動が見られました。朝から昼までは陽気は比較的保たれます。一方午後からは陽気をからだ内部にとどめ置けなくなるため体表に水と共に移動します。ゆえに汗ばみは午後から夕方にはじまります。夜中は陰が強くなるため汗は出なくなります。火神派の典型例と言えます。

火神派の人は基本的にウルトラ冷え症の陽虚です。老化兆候があれば八味地黄丸が基本です。それで効きが悪ければ牛車腎気丸、更に悪ければ修治附子末を少量併用していきます。老化兆候が無ければ人参湯加修治附子末の附子人参湯です。また水の偏在の是正の基本生薬は麻黄です。麻黄の入ったエキス剤が必要です。葛根湯は肩こりなどで長期服用している人も珍しくありません。安全度が高いと思われます。ゆえに、水の偏在是正のエキス剤は葛根湯が良いと思われます。

ウルトラ冷え症のくせに暑がり、でも暖かい物が好きな人、こんな矛盾だらけの人が近くにいませんか？